

春燈

十月号

10

October 2008



成瀬櫻桃子の句

花散るや象の芸見て一家族

句集『風色』昭和四十八年

二十年勤続の会社を退職した記念の家族旅行の折の句である。象の芸を見ている幸せそうな一家に桜の花が散りかかる美しい光景だが一抹の哀感が漂う。四十七歳にしての転職は櫻桃子先生にとり複雑な胸中であったと察せられる。掲句と並び〈新参に机の角が有りにけり〉がある。この年に『風色』を上梓。企業人、俳人として立派にご活躍なされた一生であった。

大室恵美子

成瀬櫻桃子の句

麦秋や旅に減らせし靴の底

句集『風色』昭和四十八年

昭和三十二年頃は高度成長の初期、作者も企業戦士のセールスエンジニアとして全国はおろか海外にも脚を忠実に縁を求めて句会を創設する成果を上げられていた。

麦秋の背景に読者は作者の人間像を映像的にどのよう
に想像するだろう。下五には作者のこの時の全人生の凝縮が痛く重々しい。春燈は先人の労あつて今がある。

中野さき江

主宰の句

安立公彦

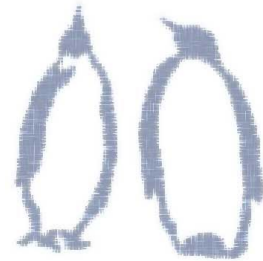
夾竹桃は昭和の色ぞ敦の忌

帰省子に島の噴煙ゆたかなり

古里や昼寝を覚ます風のかゑ

香具山へ天の下闇つたひゆく

掌上に蛸うごかぬせい子の訃（悼）



特別作品（抄）

夏の日

太田佳代子

薫風や子の号令の朝ごはん
自らの飛沫を抜けて夏の鴨
夏草や我をひつぱる子のちから
噴水の真似も上手に二歳の子
変はりゆく都会の家並み夏落葉
ふるさとや母のみ足りぬ夏座敷
先達の水へ落ちゆく滝の水
風鈴やいつの間伸びし子の背丈
夕焼や男に生れし子の背中
やうやくに子を寝かし見る遠花火

特別作品(抄)

途中下車

荻野嘉代子

滝落つる峽とは知らず途中下車
滴りや隧道の駅日を恋ひぬ
竜神の霊水残す七変化
短夜の渡る瀬音や平家墓
この里は沙羅とは言はず夏椿
山法師安らぐ白に畏怖もあり
哀歎の青嶺に籠る落人村
青嶺撫然静かに進むダム工事
大樹背に涼しかりけりひとつ墓
みんなみや六代果てし田越川

当月集

安立 公彦選



○ 中嶋昌子

逝き給ふ水無月青き風の中(悼)

遠花火今宵は逝きし人のこと

日盛りや本場のインドカーリー佳し

敗戦忌遊就館に子を連れて

デーケアの車椅子押す星まつり

○ 久本久美子

律を呼ぶ子規の声とも花糸爪

六尺に臥して玻璃戸の雲の峰

自画像のもの言ひたげな大暑かな

手足延べ寝莫産の海に浮びけり

芋坂や団子頬ばる夏帽子

○ 清水美子

川風や手櫛に絡む河鹿笛

炎昼の己が引く影なかりけり

夏逝くや風が頬打つ夕まぐれ

子規庵の夜涼またるる六畳間

初秋や戸を繰りをれば増ゆる星

○ 原 秀 三

聖母像仰ぐや青水無月の空

雨に咲き雨にこぼるる花とべら

老犬に投棄続く梅雨の冷

亡きひと眠れと消しぬ梅雨灯

陸窪む遺愛の硯洗ひけり

○ 谷 秀 子

つつましく生きる幸せ枇杷をむく

うたひつつ探してをりぬかたつむり

夏風邪の児の泣き声の二階より

鈴蘭の去年咲きぬしが見当らず

野苺を時につまみて畑仕事

春燈の句

安立 公彦選

万緑をつなぐ吊橋渡りけり

東京 吉川 隆

郭公や富士は一日雲の中

日当りの移つて来たる昼寝かな

夏草や二軒長屋のもやひ井戸(子規應)

触れてみる心の胼胝や敗戦忌

向日葵の黙の重さに対峙せり

P波とも立ち眩みとも日の盛り

びいどろの底のアンニュイ夕日影

ころろざし高く鉄線咲きのぼる

野良着の紺茄子に盗まれ褪せにけり

行き先のすでに決まりし梅を干す

また来ると母の手握る土用かな

梅雨明や髪梳る手のかろし

千葉 中村紀美子

透きとほるナースの声や朝曇

点滴の粒の銀色朝曇

病室の朝のペランダ小鳥来る

旅急ぐ身にひとしきり蟬しぐれ

葦は丈揃へてあたり戻り梅雨

底力見せて流るる夏の潮

一日の長さかばかり沙羅の花

塩尻峠越えて信濃の月涼し

信濃路や風ふきぬけし夏座敷

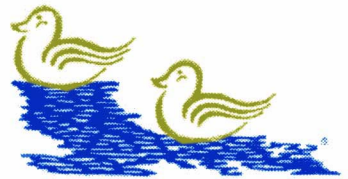
空蟬や子の独り立ち案じをり

諍ひし悔のいささか髪洗ふ

日傘さし縁を切りたき手を合はす

間違ひの数をかぞへて過ぎし夏

東京 竹林 月夜



神奈川 葦原 霞切

東京 高村 和子

余言

安立公彦

に組み入れなくてはならない時が来るかも知れない。

今、私たちに出来ることは何だろうか。大量消費、大量廃棄に結びつく大量生産方式が見直されていると聞く。

日常の省エネ生活は当然のこと、更に俳人として、季節と季節の照応した俳句が、時代をいかに見ごとに切り取り得るかという作例を、今こそ真剣に考えるべきである。そしてそれこそが私たちの温暖化防止への側面からの主張ではなからうか。

デーケアの車椅子押す星まつり

中嶋 昌子

現代俳句は幾多のむつかしい問題を抱えている。その中で将来に亘って最も重要なことは、地球の温暖化ということだろう。それは問題の重要さから見ても、俳句のような一文芸詩型が取り上げるべきものではないかも知れない。しかし俳句の世界において、地球の温暖化は季語の存亡にかかわることである。

わずか十七字から成る俳句が、芭蕉以降でも三百年の歴史を持つことが出来たのも季語に負うところが大である。その季語は季節の彩りが豊かに循環するということを不変のこととして成り立った。

歴史的に見てもつい最近までは、その不変は確かなものだった。夏の夜、涼をとるために、打水から団扇、扇風機で充分だった時代はどこに行っただろう。このまま行けば、少なくとも秋の季節の内、初秋と呼ぶ期間を晩夏の中

今宵は七夕。牽牛、織女の二星が年一回相会するという風習にこころ踊らせた昔日を思い、作者は今デーケアの車椅子を押している。老いて何らかの障害のある人か、回復訓練中の人か、車椅子に乗っている人の描写はない。しかし一句を通して介護する人と受ける人の姿が確かに浮かんでくる。

芭蕉は不易流行の言葉を残した。〈デーケア〉は今の時代の、まさに「流行」と言えよう。

首振つて愚痴につき合ふ扇風機

矢口 笑子

一読滑稽味を覚える句だ。扇風機を擬人化しているのもいい。「首振つて」が誰れにも言えそうで言えない言葉だ。〈夕焼に汽笛を放つ遊覧船〉の句は、一転抒情の調べを美し

く表わしている。

作者は五十三歳。五句を通してしっかりと表現も納得出来る。

燃えつきるまでの門火を見守りぬ

三代川玲子

この門火は送り火だろう。作者は一昨年最愛の母を亡くした。今年六月、「母」と題する手作りの句集を編み、知人に配っている。文字の打込みも表装も全て手作り。こういう句集を見ていると、俳句というものがいかに日常に密着し、作者のこころを十分に満たしているかということが分かる。この句はまさに「門火」の句である。

その夏の玉音耳朶に残りしまま

後藤 大

昭和二十年八月十五日、あの日から六十四年の歳月が過ぎた。改めて過ぎ去った歳月の嵩を思う。

私は小学校六年生だった。校舎は焼失し、級友にお寺の子が居て、その本堂を借りて授業を続けた。玉音放送はついに聴くことは出来なかった。あとでラジオから流れる録音を聴いた。昭和天皇の抑揚ある声は、あの夏の青空とともに今も時折り思い出す。作者もそういう思いを抱いて心に残る玉音放送を反芻しているのだろう。

フレンチトースト黙もくと食ふ敗戦日 向井 芳子

作者も戦中の生れか。八月十五日は終戦日でなく敗戦日である。時間的には戦争が終った日だが、実際は戦いに敗れた日である。季語の持つ曖昧さの一つと言えよう。

その敗戦日にフレンチトーストを食べているという。それも黙もくと食べているという。何か声を上げたい思いが作者にはあるのかも知れない。甘味のあるトーストを食べていると、遠い日の敗戦の日が思い出されてくるのである。

傘・眼鏡・夏手袋と黒揃へ

倉賀野陽子

お洒落とは何かと聞かれても当然のことながら的確に伝えることは出来ない。日傘は黒が流行している。手袋も黒のレースなど締りがある。眼鏡はどうか。作者は炎天の街を歩くにも黒を基調とし、それがお洒落になっているのだ。きつぱりとした気性の良さが自ずと句に表れている。

月下美人妻は健やかなるがよし

大口 憧遊

正直な句である。男性なら誰れしも妻の健康を願わない人はいない。ましてある年齢になるとその思いは一層つよい。この句、つい中七下五に注目が行きがちだが、季語の「月下美人」がいい。この季語によって一句を俗から雅趣に転じている。